

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認誌第六二七号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回)日発行
平成十七年十二月一日発行(第百八巻第十二号)



俳句随想

二百八十二

汀子

俳句ブームと言われて久しい。それに伴う弊害もまた増えているように思う。俳句の商業主義化を憂う声は前からあったが、最近は俳句産業という言葉さえ聞かれるようになった。この辺で私達俳人は少し立ち止って周囲を見回して見る必要があるのではないか。何もかもが猛スピードで進行し変化していく世の中であって言葉でさえ目まぐるしく変化しつつある。そんな中であって私達俳人は毅然として美しい日本語を守り、美しい言葉による俳句という詩の魅力を世に示して行かなければならない。俳句は自然を詠む詩である。(もちろん人間も自然の一部であることは論を俵たない。)しかしその自然はどうであろうか。地球温暖化によって災害が異常に増え、四季の推移さえおかしくなっているのではないか。私たち俳人はもつと自然を見つめ、自然の語る多くの真実を見逃さないようにしなければならぬ。短い詩であればこそそれは地球の未来を語る予言とも箴言ともなり得るのではないか。

旬日記 汀子

平成十六年十二月一日 有恒俳句会 山中湖

富士忘れ 枯木林に 包まるる
落葉踏み山荘の 鍵開けて入る
鍵開けて 暖炉焚く間も 客溢れ
第二句会

暮れゆるける富士を 惜みて 冬夕焼
富士を消し 星生む 闇の寒さかな
怪我の手を 忘れて 使ふ 日短
十二月二日 第三句会

刻々の富士の 夜明も 旅の冬
目の覚めるたびに 富士見る 旅の冬
快晴の朝 富士となる 寒さかな
富士の雪見ゆる 月光射し ぞめし
枯木立越しの 富士山ありに けり
十二月四日 芦屋ホトトギス会

冬の鳥鳴き 澄む朝でありし かな
冬帝に 委ねし 富士の 懐に
十二月五日 関西野分会

よべ荒れて 庭の 落葉を 尽しけり
岳麓の 冬田 抜け ゆく 明るさよ
木兎 鳴いて 岳麓の 森 銜せり
十二月五日 下萌句会

一枚の 水面し づもる 浮寝鳥
比叡おろし 湖面 渡りぬ 浮寝鳥
括りたる まま 枯菊の 刈られけり
岳麓の 富士を 隠さぬ 冬木立

菊枯れて 香り 残りて ありに けり
十二月七日 無名会

先陣の 白鳥として 領す 湖
息白く 話し 昂りを けり
白き息 見えぬ 外出は 軽装に
師走とはいへど 案内ある 余裕
しきりなる 銀杏落葉に 包まるる
息白くなくとも 朝の身ごしらへ
渡り来しばかりと 見えぬ 白鳥も
十二月七日 日本伝統俳句協会忘年会

年の瀬といふ 実感の なきままに
絶え間なく 降り来る 銀杏落葉かな
不自由な手に 冬ぬくきこと せめて
十二月九日 清交社

沈黙は 金短日を 恪勤に
又明日がある 短日の 帰路となる
星消えてゆく 短日の はじまりし
渡り来し 鴨の 一陣二陣かな
五時はまだ 星の 綺麗置く 冬の朝
短日の 計画 立てて みてしもの
十二月九日 工業倶楽部

星の 綺麗 仰ぐ 旅立 冬の朝
浮寝してをり 渡り来し 水鳥も
初雪の少し 消えぬ 富士と 見し
富士目ざし 来し 水鳥も ありぬべし
十二月十四日 大阪倶楽部

仰ぎたる 空オロン 座冬木 越
見えてくる 星一つ づつ 冷たさよ
快晴の冷たき 朝でありし かな
街の灯の 届かぬ 闇の 冬の海

十二月十四日 綿業倶楽部
冬ざれば 闇に 沈みて 星の 綺麗
行届きたる 手入とは 冬ざるる
山荘の 冬芽 抱ける 木々 高し
十二月十五日 夏潮句会

ホトトギス CD ロム 化 漱石 忌
猫好きも 犬好きも みて 漱石 忌
校正に 誤りの あり 漱石 忌
注意札 貼つて 落葉の 庭案内
冬薔薇の ための 温度を 保つ 部屋
十二月十六日 龍野の大会に 寄せて
今一度 訪はん 龍野の 冬紅葉
十二月十七日 時雨会

骨折の 癒えて 近づく クリスマス
ふたご座の 霜夜の 星を 仰がねば
穴に入る 熊の 値踏みをして けりし
考へを 少し 明かして 霜夜かな
玄関に 待降節の 飾り 先づ
十二月十八日 野分会

みみづくの 鳴けば 深まる 森の 黙
木兎 鳴いて 聞ふくらんで 来たる 森
まだ 明日も 予定あり けり 十二月
十二月二十日 悼金子兜太氏ご母堂様
母上を 語られし こと 年惜む
十二月二十二日 悼小田尚輝様
お人柄 惚ぶ 冬あたゝ かき日に
十二月二十三日 ロイヤル吟行会
冬晴を 至福としたる 旅路かな
浮寝する 鴨に 気づかれ 気づき けり
枯芝に 躡くま じく 順路あり
冬の雲い ま 青空の 中に あり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年十二月一日 一水会

寒禽の羽音に余呉湖明け初むる
枯芝に吸ひ込まれたるミスショット
飛竜頭の端が崩れておでん煮ゆ

十二月二日 蕉心会

一とところ寒禽寄せて川の黙
猫も又師走の顔をしてをりぬ
漱石忌までに新札使はねば
明日からの旅冬晴を約す空
君が来てこそその忘年会であり
アスファルトパーカッションとなる枯葉
釣人が地球を釣つて冬うらら
冬日燦イルミネーションめく川面
皂角子の振れねぢれて乾洞びて
十二月三、四日 はっぴい吟行会
冬滝の水音乾いてをりにけり
巖尖る雪の谷川岳であり
溜ることなき吹割の滝と君
冬帝を拒む水音でありにけり
日表に日裏に冬木彩られ

雪吊に生活の形ありにけり

新雪に靴の存問始まれり

そげなこつしてまでスキーしたかとか

きつと居るこの凍星の中に君

昨夜星の楽を奏でし冬の空

稜線をふはと飛び出す冬日かな

ストープの煙木の香と山の香と

蒼々と遠山枯れてをりにけり

億光年てふ凍星を近づけて

十二月九日 土筆会忘年会

黒々と明けて白々冬の朝

冬の朝晴後雨といふ都心

湯ざめせし吾子の寝息を確かむる

冬の朝渋滞著き都心かな

十二月十日 伝律句会 神奈川・東京合同会

冬風や連合艦隊統べし海

ランドマークタワー冬日に歪みたる

あれ 鴉い や 鳩 鴉 鳩

赤煉瓦冬日吸ひ込む角度かな

冬日向汽笛の濡れてをりにけり

十二月十四日 新流会

水尾交す鴨の対話でありにけり

水嵩も鴨を育むものとして

冬うらら蒲焼に虚子偲びもし

焚火背に語り部いよよ饒舌に

冬ざるるにはまだ早き河原かな

十二月十六日 登高会忘年会

オリオンの存問受けて枯尾花

膝奪ひ合ふ猫二匹日向ぼこ

日向ぼこ地球の自転確かめて

日向ぼこ雲係りもなく西へ

十二月十七日 時雨会

熊穴に入り里山の景となる

しやりしやりとばりばりりと霜夜かな

クリスマス待降節を耐へてこそ

熊穴に入りて安堵の村となる

グロリアインエクシエルシステオクリスマス

十二月二十一日 草木瓜会忘年会

能面の冷たく笑まひをりにけり

底冷に猫固まつてをりにけり

十二月二十二日 目黒学園句会

街の灯もポインセチアに染りたる

冷たさや爪切る音の乾きをり

冷たさといふ序破急にありにけり

忙しなくポインセチアに暮るる街

十二月二十八日 若水会

枇杷の花葉といふ主役ありにけり

ツリー先づ片付けてより年用意

年用意やうやく主婦の顔となり

暦壳虚子の頁を先づ見せて

雑詠

廣太郎 選

かくれんぼみんな出て来て来て虹仰ぐ 神戸 長山あや
 川床料理きびきび運ぶ素足かな 同
 夕顔の館に在りし美穂女橋 同
 原爆忌雨の降らうが降るまいが 広島 藤 丹青
 空は青雲は白なり原爆忌 同
 原爆忌川は朝より流れをり 同
 熱きほど小銭を握り来る夜店 八尾 岩垣子鹿
 雀落ち来る極暑の大樹より 同
 曇天の一角崩れ滝となる 同
 筆洗ひ硯洗ひて手を洗ふ 榎原 稲岡 長
 硯洗ふ心を洗ふ如くにも 同
 風邪おして踊る阿呆になりにゆく 同
 止まれる雷遠からず近からず 高崎 吉村ひさ志
 落雷や大地根こそぎ震はせて 同
 雨音を頭上に残し雷渡る 同
 忘れめや貴船の川床の小流れを 龍野 浅井青陽子
 鮎ちまきなども召されて舟遊 同
 羅の刀自の姿のなつかしや 同

阿波踊百の表情見せる指 明石 涌羅由美
 句友より踊仲間として集ふ 同
 赤といふ心意気見せ踊連 同
 人知れず旅発つ朝の露涼し 京都 安原 葉
 又次の旅へ朝涼発つひとり 同
 泣けばすゞ弟のもの浮人形 同
 揚花火しだれて闇に吸はれけり 芦屋 黒川悦子
 万華鏡なりし大空揚花火 同
 大花火闇を背負つて果てにけり 同
 殿の客も着きたり月見草 神戸 山田弘子
 灯を低く下げて夜店の整ひぬ 同
 かの島の夕焼行きの切符買ふ 同
 涼風の茶屋に根付きし如ひとり 秋田 浅利恵子
 若さ失せゆく暑さ負け諾ひて 同
 秋を待つ心に風を見てをりぬ 同
 目をつぶることが表情牛冷す 東京 今井千鶴子
 尻尾だけ生きてゐるかに牛冷す 同
 島ひとつ燃やし尽くさん大夕焼 同
 竪穴住居梅雨の炉煙漏れつらん 東村山 村松紅花
 炎天や烏鳴き問ひ鳴き答へ 同
 気ままさよくらげ一と浮き一と沈み 同
 万緑やうつうつとして湊川 姫路 桑田青虎
 車椅子楠公墓所へ五月雨るる 同
 掛香の香に一番の客となる 同

雑詠句評（十一月号より）

美奇・保佳・憲明
千鶴子・中正・芳子
忠彦・静龍・むつみ
葉・明倫・廣太郎

生涯に一日のさくら汝が桜 東京 今井千鶴子

「この世に生きている間、今日この日、この時、一日のさくら、それはあなたの桜」と作者は語りかけるように、独り言のようにこの句を詠われた。まこと存問の句である。

ご息女、今井肖子さんは第十六回日本伝統俳句協会賞を受賞された。「花一日」である。桜を見事に詠み、様々な情景を柔らかく、ことに花を包む彩の美しさには感嘆する外はない。

三十句を全て桜で纏め受賞の榮譽に輝かれた「花一日」——「一日のさくら」である。受賞者に言わせれば「敵しい母」である掲句の作者は、このように優しい母として「汝が桜」を詠まれた。表彰は確かに「生涯に一日」であったが、肖子さんはこれから生

涯に何度も素晴らしい佳句、秀句を詠まれることと思う。

（美奇）

晴れの舞台を迎えた御嬢様に対する最高の贈答句。授賞式には筆者も出席していたが、この一句で、作者の娘に対する気持が、これまでの人生も含め全て凝縮されているのではないかと思われるほど強烈に伝わってくる。季題に託した秀逸なる祝句のお手本ともいえる句である。（廣太郎）

小筥解くごとくに枇杷を剥きにけり 八尾 岩垣子鹿

筥は箱と同じ意味であるが、本来は飯を入れる箱、竹籠の米びつなどを言う。この句は一寸重々しい枇杷を剥く時の感じを述べたものであろう。「小筥を解くごとく」という表現がやや古風であるが瑞々しい枇杷を剥く時の実感が伝わってくる。（保佳）

何か装飾を施されたような美しい「筥」が筆者には想像出来るが、何か大切なものを紐解いているような所作が見て取れ、それが「枇杷」を剥く所作と不思議に重なり合っている。本来あまり上品な食べ方が難しいのではないかと思われる果物であるが、雅な雰囲気醸し出されている。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

子選

何も彼も梅雨霧晴れてからのこと
 山寺の涼しき風を貰ひけり
 郭公や牧舎は遠し馬柵の果て
 籐椅子の白樺に向き浅間向き
 句碑涼しわが俳諧のよりどころ
 小綺麗に涼しく住まひをられけり
 峡宿の熊の毛皮を踏む出入
 水鳥に異変か小夜のぞめきあり
 洗ひたる筈の硯の汚れをり
 箱庭に四ッ手上りしところかな
 立浪草鳴門は紫外線に満ち
 光満つ方は紀の国卯月浪
 沈黙と推敲重ね春深し
 親を追ふ子鴨浮葉の上走る
 梅雨明の大暑の日々のこれ程に
 言の葉のころにしみて涼しけれ
 かくれなきとは桐の花咲く高さ
 そこに鳴き雨に下山のほととぎす

仙台 赤川誓城
 同 岩垣子鹿
 八尾 同
 伊賀 藤井充子
 同 藤井充子
 金沢 藤浦昭代
 同 藤浦昭代
 神戸 後藤比奈夫
 同 後藤比奈夫
 徳島 上崎暮潮
 同 上崎暮潮
 豊中 瀧 青佳
 同 瀧 青佳
 龍野 浅井青陽子
 同 浅井青陽子
 河内長野 吉年虹二
 同 吉年虹二
 司 同

沈みたく眠りたくとも浮いて来い
 空蟬のからつぽといふ存在感
 ばらばらと裸が走るスクール来
 島の夜の流るる星に眠るかな
 地震つづく東京に泊つ暑さかな
 台風の余慶の涼は昨日まで
 夏萩に大きな風のとりつきし
 いま咲きし白き蓮の産毛かな
 行く水の色空の色秋立ちぬ
 雲二つ二上にある秋立ちぬ
 青石といふ涼しさに彫られたる
 香水といふ一滴の祝ぎ心
 夏椿とて山の日をすべり落つ
 草いきれ胸の中まで幼き日
 荒梅雨といふ戦場のごときもの
 濡れそぼつとは子雀のやうにかな
 百花園萩のトンネル今若葉
 梅は実に道知辺とぞ名札下げ

神戸 長山あや
 同 長山あや
 東京 今井千鶴子
 同 今井千鶴子
 京都 安原 葉
 同 安原 葉
 明石 中杉隆世
 同 中杉隆世
 榎原 稲岡 長
 同 稲岡 長
 東京 稲畑廣太郎
 同 稲畑廣太郎
 同 坊城俊樹
 同 坊城俊樹
 熊本 岩岡中正
 同 岩岡中正
 福岡 松尾緑富
 同 松尾緑富

天地有情句評

汀子

箱庭に四ツ手上りしところかな 神戸 後藤比奈夫

箱庭という模型のようなものには、四つ手網が掛けられた川まであるのだろうか。想像するだけでも楽しくなる箱庭が描けた。

光満つ方は紀の国卯月浪 徳島 上崎暮潮

海に近い阿波の国の東の本州紀の国を見ている作者。光が満ちているように見える紀の国から寄せてくるかに見える卯月浪。

沈黙と推敲重ね春深し 豊中 瀧 青佳

晩春である。一句を授かるため静かに心を見つめ、言葉と出会ったら推敲を重ねる。一句の出来るまでの楽しみと苦しみ。

梅雨明の大暑の日々のこれ程に 龍野 浅井青陽子

梅雨が明けた途端の厳しい暑さは予想を遥かに上回った。健康を大事に我が身をいとう作者の春秋。

かくれなきとは桐の花咲く高さ 河内長野 吉年虹二

どんなに高く咲いても、桐の花は目立ってよく見ることが出来る花である。案外近づいた方が見えにくい。

何も彼も梅雨霧晴れてからのこと 仙台 赤川誓城

しなければならぬことが山積みである。あれもこれもと思つてやりかけるが、結局梅雨霧が晴れなければと悟つた作者。

郭公や牧舎は遠し馬柵の果て 八尾 岩垣子鹿

広々とした牧場、郭公の鳴く森のたたずまい。避暑地としての生活のゆとりが見えてくる一句。

句碑涼しわが俳諧のよりどころ 伊賀 藤井充子

如何にも涼しげな雰囲気句碑を俳諧のよりどころと思つている作者の心情の推移が想像される。

峡宿の熊の毛皮を踏む出入 金沢 藤浦昭代

この峡の宿はそこで生け捕られた熊なのか、玄関に熊の毛皮が敷かれてあるような山深い宿に泊つた作者。